

---

# 留離垣家の日々～成十華高等学校

謎の男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

留離垣家の日々〜成十華高等学校

### 【Nコード】

N8539V

### 【作者名】

謎の男

### 【あらすじ】

成十華高校せいじゅうかの二年生、留離垣翔介。成績はいたって普通の一般人だが、スポーツは球技の類なら得意な方だ。ある日の帰り道で、俺はふとした出来事により一人の美少女と、運命的な出会い？をした。「なんだこれ、良くあるラブコメの展開か？」そしてその後、俺はなぜか追い掛け回されるハメに。やっとの思いで家に帰り、安堵の息をはき、疲れきった体で玄関のドアを開くと、そこには一緒に暮らしている母さんと、またもや美少女！？まずは挨拶からと思いきや、「あら、この人が私の恋人？」総理も驚きの一声。しかもなん

か俺の弱みを握ってるし！

翔介の高校生活はハードスケジュールのものとなる。

## プロローグ

西嶋香織。

成績優秀。それでいて美少女。運動は・・・そこそこ。注目の的。成十華高等学校の先生方、生徒、それと地域の人、他校にまで広がっているその名前。

成十華高校の人だったら、この名を知らないものはいないだろう。

彼女と話したい男子がいるなら、それは叶わない望み。

何せ彼女は男子と話そうとはしない。

それは成十華の男子生徒だったら百も承知。

彼女が成十華に入学してから、現在の二年生に至るまで、誰一人として男子と会話をしている姿なんて見たことがないという。

彼女が会話相手にする人といえば、男子とは話すことがないのだから、自然とやはり女子となる。それも特定の数人の女子と。

そりゃ異性より、おなじ年齢で同姓の方が話は合つと思うが。

特定・・・つて。

いや・・・本当に信じられないよ？普通に高校生活を送っていたら、異性と話すことぐらいあるだろうし。別に彼女が普通に過ごしていないわけではない。俺も成十華に入学してから、今の二年生まで、彼女とは一緒のクラスだが、確かに男子と話している風景なんて神以上のものに誓ってみたことがない。

まったく美少女なのに。

羨ましいんだか。

羨ましくないんだか。

どっちにしろ、彼女が男子と話しているという大イベントが発生し

たとしても、俺にとって西嶋は高嶺の花で、まさに雲の上より高いものとなる。何を隠そう美少女。なんともいえない黒髪で薄く茶色が混じり、ショートカットで清楚な印象をつける。

俺も何度かアピールしてみたことがある。体育で種目がおなじ時に、バスケットで綺麗なレイアップを決めようとしたが、あえなく着地失敗。その日は捻挫。もう世界一周走り出したくなるような恥ずかしい思いをするだけ。

もうきつと距離が縮まることがないだろうな。

まあ、まさかあんな日にあんな衝撃的な出来事が起こるまでは。

## 運命ですね 前編

俺の名前は留離垣翔介。

現在母さんと二人暮らしで兄弟はいない。

兄弟ほしかったんだけどな・・・。

父さんのほうはというと行方不明。別に山で遭難したとかではなくて、母さんによると「どこかで仕事をしている」とのことらしい。

俺自身会ったことも話をしたこともない。

俺が物事を記憶して思い出せるようになってた頃には父さんの姿はなかった。

てつきり離婚してるのかなと思って母さんに聞いてみたんだが、それについては否定。

なんだよそれ、じゃあ別居でもしてるのかとも聞いてみたがやっぱり否定された。

生活にかかわる費用だけは毎月送ってきているらしい。

いや、すごく疑問に思いましたよ？離婚もしてなく別居もしてなく家にも帰ってこないだなんて。それこそUFOのような謎が多い夫婦関係なのである。

俺も今頃会いたいだなんて思わないし。会ったところで天変地異が起こるわけでもないからどうでもよくなってきたらいいんだが。

俺が通う成十華高校では「運命」っていうのが流行っているらしい。ちなみに男子の中だけの話だ。

もちろん、ベートーヴェンの交響曲第5番の運命ではなく恋愛の意味での運命だ。

なぜこんなことが流行っているのか。それは西嶋香織という人物と関わりたいかららしい。

何を隠そう男子があこがれる美少女。運命的な出会いでもいいから彼女と話したいという男子が大勢いる。

普通に話しかければいいじゃんなんて思うのだが。まあ、そんな先手を打つものがいたとして仲良くなったら、周りの男子は嫉妬をこめてそいつを恨むだろう。校内で戦争がおきてもおかしくない。

俺はそんなフランス革命のようなものには関わりたくない。痛いのは御免だ。

だが、起きてしまった。

誰もが予想もしなかった出来事が。

運命。

そう、彼女との西嶋香織との運命的な出会いが俺の身に起きてしまった。

時期は入学式が始まって二週間ほどたつ。去年と同じく今年も西嶋香織と一緒にクラスになった俺は、いつもの変わらない下校をしていた。二年生になると修学旅行などの大イベントが迫っている中で、俺はスキップスキップランランという気分で住宅街が密集する十字路に差し掛かろうとしていた。

そこで事故はおきた。

まるでドラマやアニメ、映画でもあるようなラブコメ的展開。

俺が十字路を左に曲がろうとした時、西嶋香織とぶつかった。

俺は驚愕……。

成十華の男子だったらキターくらいの喜びを心の中で叫んでいたかもしれないが、おれにはむしろやっちまったーという感情の方が顔に浮かんできた。

「うわっ」

その耳に残るような声とともに彼女は地面に尻をついた。

俺はとつさに「大丈夫か？」と声をかけようとした。だが、彼女は制服のようで、そこから見える綺麗な肌をした太ももに、一瞬言葉

を発するのを忘れてしまった。

ああ、俺大丈夫かな。変な気起こさなければいいが。

「えっと、大丈夫ですか？・・・」

「え、あ、はい。」

幸い、彼女は地面に尻をついただけで怪我はしていないようだ。

よかった・・・。

他に心配することは周りに成十華の生徒がいないかだ。

すばやく辺りを見渡す・・・。

よし、誰もいない。

そんなことを確認してから安堵の息をはき、彼女に振り返ろうとした。瞬間。俺の左足が右足に絡まり倒れてしまった。

「うわぁー！ー！ー」

俺は視界が流れていくのを見届ける。

そして・・・。

彼女の両肩の横に手をつき何とか受身をとった。彼女に覆いかぶさる状態。

彼女は予想もしていなかった出来事に、避けることもできず上半身を後ろに後退させるしかなかった。

よかった叫ばれるなんて事されなくて。

とりあえず誰も見ていないことを祈るばかりだ。もし成十華の男子にでも見られたら同盟なんて発足しちゃって俺を殺しに来るだろうからな。

とりあえず、黙って早く体を起こして謝ることにしよう。

さあ！動け体よ。誰かに見られる前に。

「こらーその少年なにをやっているー」

甲高い声が道の上を響き渡る。

慌てて顔を上げて、俺は声の主が誰なのかを確認しようとする。  
ん？なぜかすごい勢いでこちらに向かってきている。

ここから見えるだけのことで判断すると警察の類ではなく、スカパー  
トをはいていて俺よりか身長は低めの女子らしい。

「ドロップキック！」

「ぐはああっ!？」

俺は苦しくうめき声を上げながら空中をぶっ飛び、道の上をどんど  
んごろごろと転がる。

しばらくして俺の体がアスファルトの上で静止した。

うっ。いつてえー。

うまく衝撃を殺したから良かったけど、まじでご臨終しちゃうかと思  
ったよ。

俺は体を起こして状況確認を始める。どうやら走ってきた女に吹っ  
飛ばされたようだ。

「大丈夫香織？気持ち悪いお兄さんに変なことされなかった？」

「……………」

「……………押し倒された」

「ちよつとまてよ。別に押し倒したわけじゃないんですけど」

いろいろと突っ込みたいことはあったが、今一番最優先されること  
について。俺は西嶋の発言に全力で否定をした。ドロップキックを  
仕掛けてきた猛獣はうちの高校と同じ制服を着ていて、見たところ  
いつも西嶋と仲良くしているクラスメイトと判明。

名前は確か……柏木咲だったか？

「ど、どういふこと押し倒したって」

咲は驚愕の声を上げながら俺に目を向ける。

「いや、あのですねこれは」

「そういえばあんたの見覚えがあるわ。名前は・・・留離垣しようすけ。平凡で地味で変態の！」

「まて、最後の言葉は少し誤解があるようだ！」

「この変態ならやりかねないわね。」

「だから変態じゃないって言ってるだろ」

「今ここで咲を襲おうとしたじゃない！咲が押し倒されたって言うからにはそれが事実なんだから！」

咲は俺に指を向けて言い放つ。全くこいつは話を進めていくのがうまいな。俺に一切の発言をさせてくれない。

「とりあえず警察を探して逮捕してもらわなきゃ」

「・・・・・・・・」

どうしてこう勝手に話が進むんだ！俺の話を聞いてくれー。

まあ、そう簡単に警察がいるわけが。

「いないよつね・・・」

そりゃそうだ、都合よくいるはずがない。いたら俺の人生が終わるよ。

まだ地面に座り込んだままの西嶋をゆっくりと立ち上がらせてから、咲はうーと唸り始めた。

「しかたないわね」

「・・・」

「こっとなったらあたしが捕まえるほかないわね」

「えー」

「えー」

俺と西嶋は雷が走ったような驚きの声を上げる。

ちよつとまで、俺もさすがに女の子につかまることなんてないと思うが。

この俺でも中学時代にはマラソン大会で3位に入った男ですから。

「ちよつと待て、一回話し合おうじゃないか」

「何を・・・」

ピリピリと気が立っている咲。レースのスタート準備は万端のようだ。

全くややこしいことになったもんだ。

「分かったよ、出頭する」

「本当か！？それはこちらとしても助かるよ」

俺は咲の言葉を終わりに決心した。そしてゆっくりと足を踏み出す。後ろに。

全力で走り出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8539v/>

---

留離垣家の日々～成十華高等学校

2011年10月9日09時18分発行